登録室リレー随筆

三重県がん登録室

登録に回った病理医のちょっとした悩み。

みなさん、こんにちは。三重県がん登録室の小塚です。前任の福留先生が県内の病院に転任されたため、昨年4月に私が三重大病院病理部から三重大がんセンターに異動となり、がん登録部門(院内がん登録と全国がん登録)を担当しています。登録部門室長として二代続いての病理医となります。病理の仕事は継続しており、がんセンターと病理部を行ったりきたりの日々となっています。着任後の大きな出来事としては、三重大学病院がんセンター内に設置されている三重県がん登録室の、設立以来4回目の院内移転があります。窓がない人工照明のみの部屋から、壁の上方に窓があり、空が見え自然光の差し込む明るい部屋になりました。同じがんセンター内のドアを隔てた隣には、三重大学病院の院内がん登録室が設置されています。がん登録部門には、院内がん登録実務者4名、全国がん登録実務者4名の事務職員が配置されています。院内がんと全国がん登録室の実務者の定期的な配置換えや、互いに協力しての勉強会が行われており、お互いの独自性を保ちつつ、連携してがん登録を進めています。

さて、私の病理部から登録室に到着しての会話は、「病理の記載で問題がありましたか?たいへん申し訳ございません」という予測謝罪から始まります。「今日はまだ見つかっていません」と言われるよりも、「所見とTNMの記載が矛盾していますが、どういうことでしょうか?」「臨床所見と異なっていますが、どちらが正しいのでしょうか?」などと疑問を提示される方が多い印象です(被害妄想?)。三重大学病院病理部には病理専門医5人が所属し、当番制で病理診断書のダブルチェックをしていますが、思ったよりも漏れがあると気付かされます。自分に無関係なミスであれば内心ホッとするわけですが、関与の有無にかかわらず、直ちに遠慮なく病理部に連絡し、確認してもらっています。病理医が室長である数少ない?利点かもしれません。ただ、そのような単純ミス以外にも、改めて気付く意外とやっかいな問題もあります。形態コードに関連する「病理診断」です。↗

↘私の経験上、病理医には親欧米派(WHO分類派)と国粋主義者(がん取扱い規約分類派)、穏健派、少数の独自路線派が存在します。分類が一致していれば問題はありませんが、同一病変に対して病理医によって異なった診断がなされることがあり、他病院からの紹介患者では各施設で病理診断が違うこともあり得ます。WHO分類は現在第5版が改訂中で、臓器毎に発刊時期が異なりますし、新WHO分類の採用可否の検討後に発刊される新規約分類はさらに時期がズレます。新WHO分類や新規約の発刊に気付かず、あるいは気に入らない、自分にはなんの相談もなかったとそれを受け入れずに、慣れ親しんだ古い分類を付け続ける先生がいます。逆に勉強熱心が過ぎ、最新論文に基づく新たな診断名が付けられていることもあります。新たな発見をした!と俺様的診断を付ける先生も厄介です。いずれも登録時に「なんですか、これ?」と質問されます。旺盛なサービス精神によってWHO、規約、最新論文の診断名が列記された場合は、どれを採用するか迷います。少ない知識を総動員して対処することになりますが、登録する側に回ると改めて病理医の迷惑なこだわりを実感できます。ドラマ化された某漫画は変人病理医を主人公にしていますが、がん登録まで考えるほどの変人は少ないようです。

三重県がん登録室に関しては、2015年に登録室紹介、2017年に登録室リレー随筆で前任の福留先生が紹介しています。私を含めた人員の配置換えはありましたが、登録室のシステムや年中行事に大きな変化はなく、以前の文章をコピペして投稿するという誘惑に駆られました。が、熱心な読者に見破られることを畏れ、今回は登録に回った病理医のちょっとした悩みを紹介した次第です。あるある!と共感していただけたら幸いです。